

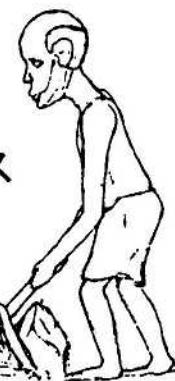


Give a nickname for this Bulletin!

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・ニュース

The Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi

30 June 1998 No. 3



どうしてアフリカ人の顔をいつも黒く塗るの？

○ 安 溪 貴 子 (生態学)

ある日本人の女性の俳優が、ハリウッドの映画に出演したとき、その名も「ショーグン」という真っ黄色のドゥランを顔に塗られたそうです。

それでは、アフリカの人々の顔はどうなのでしょうか。

20 年前、夫とともにはじめてコンゴの森の村に約 1 年を暮らした時、私は、ママたちの世界に迎え入れられました。一人の人間として、仲間にしてもらって、女の仕事を習い、少しづつ言葉を覚えながら、スケッチをしたり、森を歩いたりしていました。滞在も終わりに近づくころにはノートを前にしてママたちと顔をつきあわせて、2000 種類もある料理の世界をおさらいしました。その時、自分がどんな顔色で、ママたちがどんな顔色かなんて、考えたこともありませんでした。

それから約 10 年かかって、その村の料理手帳をまとめることができました (ANKEI, 1990)。そこには、アフリカでいつのまにか覚えた絵をもりこんでみたのですが、ケニア人の友人にその本を見せたとき、上手な日本語でこんなことを言われました。

「日本人がアフリカ人を描いた絵で、顔に影が付けてないのを見たのはこれがはじめてや。アメリカでもヨーロッパでもみんな影をつけてるよ。」

ええっ！なんで顔に影をつけるの？どうして？そんなこと考えたこともなかった。——日本人が顔を黄色く塗られて傷ついたように、アフリカの人たちも顔をいつも黒く塗られて傷ついてきたのだ、とわかるまでしばらく時間がかかりました。

これからしばらくの間、この通信を飾るさし絵が描けたらうれしいと思います。

ANKEI Takako, 1990 *Cookbook of the Songola: an anthropological study on the technology of food preparation among a Bantu-speaking people of the Zaire forest.* *African Study Monographs*, Supplementary Issue, 13: 1-174, Kyoto University



Kusonga ugali.

Why Do You Always Shadow Our Faces?

ANKEI Takako (ecologist)

Thanks to my two year's stay in Congo-Kinshasa, I published a cookbook of a local people who kindly accepted me as their friend. After its publication, one of my friends from Kenya told me that he was surprised and was happy to find that I did not shadow faces of my African friends. He points out that like most Western media, Japanese tend to shadow Africans faces in most cases. I reminded of the experience of a Japanese actress who had a film taken in Hollywood; a yellow color was specially prepared to be spread on her face.

センター・ニュース

できごと

6月

- 3日 足達駐在員、ケニア大統領府に J. E. Ekirapa 氏（調査許可担当次官）を訪問。国家科学技術審議会（NCST）と学振との交流について協議。
- 10日 松田良平氏（インディアナ大大学院博士課程）来訪。
- 11日 Ernest Shivutse 氏（ナイロビ大心理学科講師、産業・組織心理学）来訪。学振セミナーの話題について相談。
- 15日 安渓遊地駐在員（山口県立大学国際文化学部教授、文化人類学）着任。
- 16日 平田秀嗣氏（トーメン、matatu—乗合タクシー研究）来訪。
- 17日 安渓・足達両駐在員、在ケニア日本大使館を訪問。加藤伊佐夫書記官よりケニアの治安について、久保利夫医務官よりマラリアの予防・治療について話を聞く。
- 25日 安渓・足達両駐在員、ナイロビ大アフリカ研究所（IAS）Simiyu Wandibba 所長を訪問。IAS と学振との交流について協議。
- 27日 第129回学振セミナー開催。参加者36名。セミナーのあと、安渓駐在員歓迎会。
- 29日 安渓・足達両駐在員、ケニア大統領府 Ekirapa 次官を訪問。NCST と学振との交流について協議。
- 30日 Peninah Aloo-Obudho 氏（ケニヤッタ大動物学科講師、魚類生態・寄生虫学）来訪。

研究者往来

- Kanyunyi A. Basabose 氏（コンゴ民主共和国自然科学研究センター）5月29日～8月9日、文部省補助金海外学術研究「アフリカ類人猿の共生・共進化に関する比較研究」による招聘のため京都大学理学部人類進化論研究室（担当・山極寿一助教授）を訪問。
- 佐藤宏明氏（奈良教育大学）7月19日～9月6日、アルバート地溝帯地域における長期的紛争による生物環境への影響調査のためケニア共和国およびウガンダ共和国を訪問の予定。

八木繁実氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・研究生）、7月18日～7月28日、国際昆虫生理生態学センター（ICIPE）/トヨタ・ミニシンポジウム「マダニ」出席のため、ケニア共和国 Nairobi の ICIPE を訪問の予定。

コンゴの森から来た留学生

安 溪 遊 地（山口県立大学）

日本に来る留学生をとりまく現実は厳しい。ことにアフリカから来る若者にとっては（例えば、宮本、1998、が報告しているように）。学問を断念して商売に精を出す例や、無惨な挫折を、私も知らないわけではない。けれども、きびしい現実の中での希望を語ることこそが、地域研究者の役割であり、教育に携わるもの務めだと、私は信じているので、私に夢をあたえ続けてくれているある若者、M君のことをお話してみたい。

M君は、コンゴ（旧ザイール）の森の村の出身である。彼の村は、私が養子として受け入れてもらった村から歩いて2時間ほどの所だ。

1990年、7年ぶりに訪れた私の村で、養父や家族からM君が日本の大学で勉強をしているということを聞いた。彼の父や親戚に会い、話を聞くうちに、日本に帰って彼に会うことが楽しみになった。

キンシャサ大学を出たM君は、日本の文部省の奨学金を得て、ある私立大学の修士課程に入学した。この大学では、授業はすべて英語で行われるのだが、M君の国ではフランス語が公用語だ。高校で習った程度の英語では、なかなかついていけない。同級生の中には、M君の変な英語を笑うものもいた。彼はそんな時、こう言ったという。「好きなだけ笑ってください。でも、そのかわり僕に正しい英語を教えてください。」ある日のこと、統計学の授業の中で、M君は先生の誤りに気づいた。先生を含めてクラスの全員がM君の指摘を頭から馬鹿にした態度で聞いていた。ところが、実際に彼が黒板の所で説明を始めると、M君の言うとおりだとわかった。その時から、彼を馬鹿にする学生はいなくなったのだった。アフリカから呼び寄せた奥さんとともに、地域の人たちに囲まれてすごした雪国の暮らしは、M君にとって忘れ難いものとなった。

M君は、ひきつづき奨学金を得て、ある国立大学の博士課程に進学した。私は、初めてM君夫妻に会う機会ができ、ウガリを中心とするアフリカのご馳走を作ってもらったりして出会いを喜びあった。ところが、今度の大学では授業はすべて日本語であった。M君の日本語との格闘が始まった。彼は、日本語を学ぶかたわら、日本人に英語（！）を教えたりしながら、専門の論文を英語で書き、先生の配慮もあっていくつもの国際会議に出席して、着々と実力をつけていった。

たまたま同じ市に住んでいた私の親戚一家は、外国人と接したこともなく、どちらかと言えば外国人恐怖症に近かったのに、M君夫妻とつきあうようになって、そのお人柄に惹きつけられていった。二人の子どもが生まれる時も、しょっちゅうのぞきに行って、子どもたちのとりこになったようだった。お金についてもまことに清潔な人物で、県全体の留学生会の中で、M君は会計

の重責を果たし続けていた。

博士課程も終わりに近づき、M君は博士論文を提出しようとしたが、指導してくれた先生は、その大学院が始まって以来、3年で博士号を取得した例がひとつもないから無理だろう、と言つた。ところが、彼は、最短の3年間で博士号を取った第一号になったのである。博士号を取得したあと、M君は、日本学術振興会の外国人特別研究員（P D F）としての奨学金を受けながら、新しい分野の研究に着手するとともに、在学中から始めていた職さがしを続けた。そんな中で、国際的な雑誌に載っていた国連機関の公募に応募したM君は、数百倍ともいわれた競争の中でただ一人選ばれ、新年度を待たずに家族とともに赴任していった。彼が選ばれたのは、その能力もさることながら、アフリカだけでなく、日本や ASEAN諸国での経験も高く評価されたからだと聞いた。彼が日本を離れることを知って、私たちは、彼の実力からして当然の結果と思いつつ、喜びと、誇らしい気持ちに満たされた。そして、日本の大学教育のために、せめてあと数年でも日本に留まって研究や教育を通して日本人の若者たちに活を入れてくれればよかったですのに、という一抹の寂しさを感じていたのだった。

コンゴの森の村に生まれたM君は、けして孤立した例外的な人物ではない。このようなすぐれた資質をもつ人材と出会い、学問や人生について親しく語りあうことができるということは、日本人として本当にすばらしい経験であり、得難い贈り物だと思っている。

引用文献 宮本律子、1998「日本に留学したい!?'」本誌2号

A Student from the Congo Forest to Japan

ANKEI Yuji

(JSPS Research Station, Nairobi)

A student from the Republic Democratic of Congo got a scholarship from Monbusho. Although he had difficulties in English, and then in Japanese, he managed to be the first student in a national university who obtained a doctorate in only three years. During his post-doctoral fellowship from the Japan Society for the Promotion of Science, he was chosen as a researcher for a UN organization. The author believes that it was his experience in Japan and ASEAN countries that made him so competent.

第129回学振セミナー

日時：98年6月27日午後2時30分－4時

話題：「NGOの進むべき道——心理・教育・カウンセリングの視点から」

使用言語：英語・日本語

話し手：Ernest Shivutse 博士（ナイロビ大学上級講師、P.E.A.C.E.名誉代表）

要旨：

産業心理学がご専門であるナイロビ大学心理学教室のシブツェ博士をお迎えして話題提供をお願いした。日本・ケニア・コンゴ民主・イギリス・フランスなどの多彩な顔ぶれで、参加者 36

名という盛況であった。きわめて率直にケニアにおける NGO のかかる問題点を指摘するシブツエ博士の発言は、参加者の共感を呼んだ。そして、21世紀の NGO が、現実を正確に把握してそれに基づいて計画を進め、自立性と永続性あるものとして相互に連携していくならば、政治的な腐敗や運営の失敗を乗り越えていけるだろうと指摘された。具体例として、シブツエ博士が深くかかわっている NGO である P.E.A.C.E. (The Psychological, Educational, and Counselling Environment) の活動を紹介し、子ども達の未来へのさまざまな取り組みを助けるため、不要になった事務機器や物品の寄贈を広くよびかけていた、と訴えられた。日本人やケニア人学生からの活発な質問とそれに対する応答があり、充実した内容であった。内容をまとめる形での通訳を、足達・安渓両駐在員が試みた。今後、日本語以外の発表も歓迎したい。

セミナー後のパーティーは、安渓遊地駐在員の歓迎を兼ねておこなわれ、解放的な戸外での交流は参加者の間で好評であった。午後6時前に解散した。

The 129th JSPS Seminar

Date: 27th June, 1998

Topic: The psychological, educational, and counselling environment - New perspectives in NGO management.

Presenter: Dr. Ernest Shivutse

Language: English and Japanese

Summary:

The session was led by a Kenyan Dr. Ernest Shivutse, Senior Lecturer, Department of Psychology, University of Nairobi. Dr. Shivutse, who is an Industrial Psychologist, received his higher education in England, Germany, and Switzerland. He is at present the honorary director of P. E. A. C. E. which is a local NGO he helped to found.

The aim of the lecture was to share with the Japanese participants the challenges of NGO work in Kenya. The seminar was attended by 35 participants, some of whom were Japanese who are involved in NGOs in Kenya, such as *Friends Society for Kenyan Children in Japan* (Shonen Kenya no Tomo), that has been in Kenya for the past two decades, and *CanDo* that has applied for registration. Present was also Dr. Kamiya, a JICA paediatrician working with the Kenya Medical Research Institute (KEMRI).

Highlighting the three economic sectors of Kenya as the Public Sector, the Private Sector Organisations, and the NGOs, the speaker observed that the main objective of NGOs in Kenya was to augment government efforts. He pointed out that lack of political goodwill and poor governance were the major problems facing most NGOs in Kenya.

Dr. Shivutse pointed out that the central concern of NGO work in Kenya is to reduce or alleviate poverty. The problems facing the majority of Kenyans are directly or indirectly caused by poverty. Local NGOs (owned by indigenous Kenyans) often face five problems : lack of data, without which you cannot plan effectively; lack of vision; mismanagement due to unrealistic recruitment policies; dependence, that is why they collapse the moment the donor pulls out; absence of systematic planning, monitoring and

evaluation.

P. E. A. C. E. hopes to make a difference by targetting children at risk (the orphaned, the abandoned, the disabled, the abused, the neglected, child mothers, and child labourers). The mission of P. E. A. C. E. is to empower households and communities to care for children and the environment. P. E. A. C. E. wants to guarantee its independence and sustainability by asking organizations and individuals to donate whatever property they no longer need or what they can spare.

—センターから—

センター・ニュースに愛称をつけてみませんか

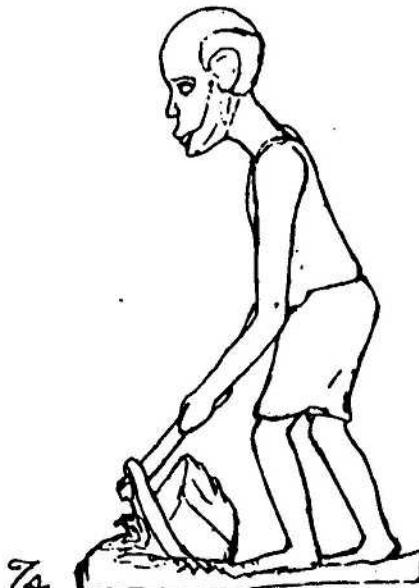
「日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・ニュース」もこれで3号となりました。

舌をかみそうな長い名前のわりに、誰にもわかりやすく、印象に残る愛称を募集します。締め切りは、8月中旬ごろまでとします。選考は、駐在員の独断と偏見によって厳正にとりおこないます。当選者には、豪華賞品が用意されているという噂もあります。

編集後記

♪これまでひとりさびしくやっていたセンター・ニュースの編集現場に、強力な援軍がやってきました。安渓遊地氏が短期駐在員としてこれから4か月間、誌面の充実に力をそいでくれます。今号であたらしくはじめたことは、カットをいれたことと、英文のサマリーをつけたことです。カットはボランティアとしてナイロビ滞在中の安渓貴子さんにおねがいしました。英文サマリーについては、第2号の宮本律子氏や今号の安渓氏の体験にあるように、われわれ日本人アフリカ研究者からのメッセージがアフリカ人にあまり伝わっていない現状を、身近なところからすこしづつでも是正していくこうという気持ちからでたことです。本当は完全な対訳のバイ（またはトリ）リンガル誌が理想でしょうが、そうするにはこの編集体制ではまだ力不足ですから、日本語の記事には英語の、外国語の記事には日本語の、みじかいサマリーをつけてみることにしました。今までと同様、みなさんの投稿を歓迎します。（太）

#表紙のロゴの挿し絵は、鍬をとる人の彫像からとりました。スワヒリ語にこんなことわざがあるそうです。Siku tatu mgeni. Akamate jembe baadaye.（三日まではお客様。あとは鍬を持たせろ。）自助努力の大切さを教えるアフリカの智恵でしょうか。（貴）



日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター・ニュース 第3号 1998年6月30日発行

編集・発行者/安渓遊地・足達太郎 発行所/日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター

The Bulletin of JSPS Research Station, Nairobi, No. 3, 30 June, 1998. Edited by ANKEI Yuji and ADATI Tarō. © 1998 by JSPS Research Station, Nairobi. All rights reserved. Published by JSPS Research Station, Nairobi, P. O. Box 14958, Nairobi, Kenya. Telephone: +254-2-442424 Facsimile: +254-2-442112 e-mail: jsps@swiftkenya.com